

ワンポイント・ブックレビュー

シヨーン・フェイ著、高井ゆと里訳、清水晶子解説
『トランスジェンダー問題—議論は正義のために』明石書店（2022年）

近年、労働組合でもLGBT・SOGIに関する周知など、取り組みが進められている。個人調査の性別欄には、トランスジェンダー等を配慮した「男性」「女性」以外の選択肢を設けることが一般的になっており、ジェンダー平等の担当者と、トランスジェンダーの組合員に対して（または、見えていないトランスジェンダーの組合員に対しても）、労働組合はどのような対応が必要なのか、といった話をすることも増えてきたように思う。

日本においても、LGBTQ+の文献や情報を目にすることは多くなったが、そのなかでトランスジェンダーに焦点を当てた文献はあまりなく、筆者自身、認識できていないことも多いと感じている。本書は、イギリスにおけるトランスジェンダーにかかわる問題について書かれた本であるが、日本のトランスジェンダー問題を考えるうえでも重要な示唆を与えてくれる。また、トランスにとって直接的な（のようにみえる）課題だけでなく、トランスが収入を得るための手段の1つとなっているセックスワークの問題や、刑務所等におけるトランスに対する差別や暴力などについても取り上げており、ジェンダーの課題、国家と国民、とりわけマイノリティとの関係における権力構造などについても論じられている。そして、本書は、トランスジェンダーをめぐる様々な困難を指摘しつつも、連帯の必要性を訴え、マイノリティが不平等から解放されることへの著者の願いが込められた一冊と感じた。

トランスジェンダーの当事者に自殺が多いことは、日本でも報告されているが、家族からの虐待、拒絶による暴力やホームレス化の実態など、イギリスのトランスの子ども、若者たちの経験や、様々なデータをもとにしたイギリスの実情が紹介されている。こうしたデータによる「可視化」は、実態把握の必要性を示す。しかし、データを可視化しただけでは、その背景にある大きくかつ複雑な問題までを排除できないという著者の指摘は、性的マイノリティに限らず、様々な不平等を経験する“マイノリティ”にも共通するだろう。

また、トランス男性が男性用サービスにアクセスできない、暴力から逃れてきた女性たちを支援する組織にトランス女性に対する偏見が存在するなど、社会のサービスや支援がジェンダー化されていることによって、当事者が必要なサービスにたどり着きづらいことも、見落としがちな課題の1つである。また、著者は、フェミニズムとトランスジェンダーとの関係を「醜い姉妹」と表現しているが、フェミニズム的なロジックによるトランスジェンダーの排除は、日本においても存在している。他方、LGBTQ+のなかにおいても、同性愛者とトランスなど、その関係性も単純ではない。LGBTQ+に限らず、課題を明らかにしたり、議論を進めるうえでは、それぞれをグルーピングすることが必要な場面も多いが、「L」「G」「B」「T」それぞれに対する理解の相違や、これらの（創られた）区分に個々の多様なセクシュアリティをあてはめきれないことが様々な問題の背景にあることを改めて理解することができた。

他国の実情をもとに書かれた翻訳書であり、かつ、専門的な用語を含む読み応えのある内容ではあるが、巻末の清水晶子氏による「解説」と、訳者解題が、その理解を助けてくれる。そこに書かれている、日本におけるトランスジェンダーをめぐるこれまでの経過と現状からは、2021年にイギリスで出版されたこの本が、その翌年に日本で翻訳され出版されたという意味も読み取れる。この「解説」と「訳者解題」から読みはじめるという読み方もお勧めしたい。（後藤 嘉代）